

本種について大桃・福富(2013)は、「上翅端近くに1対計2個の白色毛斑があるが、消失する個体もある」としているが、福富ら(2022)は「鞘翅には1~3対の斑紋がある」としている。今回報告する個体は、斑紋の掠れが見られる個体以外は上翅の白色毛斑が3対認められた。

具体的な採集状況は以下の通りである。日の出町の例では、午後3時頃、クヌギ・コナラの伐採地付近の林縁で、高さ5m程のカシ類と思われる葉や枯れ枝を叩いて得た。八王子市の例では、2021年はブナ科樹木萎凋病(ナラ枯れ)で伐採されたシラカシ材上で目撃し、2022年は採集日の数日前に折れたコナラ太枝上から得た。稲城市の例では、午前8時過ぎに、日当たりの良い林縁に立てかけるように置かれた径5cmほどのコナラ伐採枝を叩いて得た。多摩動物公園の例では、いずれもコナラ衰弱木(胸高直径16cm)の地上高0.5~1.5mの幹から得たが、本種がこの衰弱木に飛来したのは晴れて気温が25℃以上の日に限られていた。飛来個体の一部は、樹幹周囲をまわりつくように飛翔したのちに樹幹に止まり、少し移動してから静止するという行動を示した。

Jendek & Polákova(2014)は寄主植物としてヤナギ属を挙げているが、過去の例を見ると、本種はミズナラ生葉(伊藤, 1999; 平松, 2000)、クヌギ枝先(下野, 2014)、クヌギやシラカシの枝先(大桃, 2011)、シラカシの伐採木(大桃, 2013; 大桃・福富, 2013)から採集されている。本報告の採集・観察例を加味すると、本種はコナラ属の樹木を侵害していることが示唆される。また、本報告のいずれの採集地点付近でも、ナラ枯れの被害木が多数確認されている。本種の分布とナラ枯れとの関連性の有無は断定できないが、今後の採集記録に注目したい。

引用文献

- 福富宏和・山田 航・瑤寺 裕・尾園 暁, 2022. タمامシハンドブック. 112 pp. 文一総合出版, 東京.
 平松広吉, 2000. サトウナガタマシ奈良県の記録. 月刊むし, (358): 27.
 伊藤 武, 1999. サトウナガタマシ本州紀伊半島に産す. 月刊むし, (341): 43.
 Jendek, E. & V. Grebennikov, 2011. *Agriilus* (Coleoptera, Buprestidae) of East Asia. 362 pp. Jan Farkač, Prague.
 Jendek, E. & J. Polákova, 2014. Host plants of world *Agriilus* (Coleoptera, Buprestidae). A critical review. 706 pp. Springer, Heidelberg, New York, Dordrecht, London.
 Kurosawa, Y., 1954. Buprestid fauna of Eastern Asia (2). Bulletin of the National Museum, Tokyo, N. S. 1 (2): 82-93.
 望月寛人, 2016. サトウナガタマシを奈良県で採集. 月刊むし, (546): 51.
 大桃定洋, 2011. サトウナガタマシを茨城県・筑波山で採集.

- 月刊むし, (487): 42.
 大桃定洋, 2013. 岩間町愛宕山で採集した甲虫類. るりぼし, (42): 60-61.
 大桃定洋・福富宏和, 2013. 日本産タمامシ大図鑑. 206 pp. むし社, 東京.
 下野誠之, 2014. サトウナガタマシを広島県で採集. 月刊むし, (518): 42.
 進藤健朗, 2022. 長野県でサトウナガタマシを採集. 月刊むし, (611): 47.
 田中 馨, 1999. サトウナガタマシを山口県で採集. 月刊むし, (346): 22.
 吉武 啓・瑤寺 裕・中谷至伸・吉松慎一, 2018. 農業環境変動研究センター所蔵日本産タمامシ科(昆虫綱: コウチュウ目) 標本目録(補遺). 農研機構研究報告 農業環境変動研究センター, (39): 193-207.

- (櫻井 博 184-0003 小金井市緑町4-2-15)
 (石田 陸 190-0182 西多摩郡日の出町平井873)
 (伊藤 淳 183-0012 府中市押立町5-1-25)
 (板倉充洋 277-0871 柏市若柴178-4-4
 柏の葉キャンパス駅前サテライト4F)
 (佐伯智哉 243-0034 厚木市船子1737
 東京農業大学昆虫学研究室)

【短報】石川県におけるフトヒメツノゴミムシダマシの初記録

フトヒメツノゴミムシダマシ *Toxicum morii* (Masumoto et Akita, 2008) は、兵庫県産の標本を基に記載された種で(Masumoto & Akita, 2008)、その後 *Cryphaeus* 属から *Toxicum* 属へと所属が変更された(Akita & Masumoto, 2015)。秋田・益本(2016)では“急速な分布の拡大傾向が伺える”と記述されており、タイプロカリティの兵庫県のほか、愛知県、福井県、京都府、奈良県、三重県、岡山県、島根県で確認されている(秋田・益本, 2016; 大野ら, 2019; 三木, 2019; 木村・池田, 2022)。

筆者は石川県においてフトヒメツノゴミムシダマシを採集しているため、同県初記録として報告する。



図1. 石川県初記録のフトヒメツノゴミムシダマシ。

報告に先立ち、同定結果をご確認いただいた秋田勝己氏、最初に本種を発見した息子の晴登にお礼申し上げる。

2 exs., 能美市松が岡, 10. IX. 2019, 渡部晃平・晴登採集, 保管; 1 ex., 同地, 15. IX. 2019, 渡部晃平・晴登採集, 保管; 1 ex., 同地, 19. VII. 2020, 渡部晃平採集, 保管; 1 ex., 同地, 28. VI. 2022, 渡部晃平採集, 保管 (図 1); 1 ex., 能美市西旭台町, 20. VII. 2022, 渡部晃平採集, 保管。

能美市松が岡の採集個体は全てライトトラップに飛来したものである。一度に飛来する個体数は少ないものの、数年継続して確認されている。能美市西旭台町の採集個体はブナ科の立ち枯れ上で採集した。

引用文献

- Akita, K. & K. Masumoto, 2015. New or little-known tenebrionid species (Coleoptera) from Japan (18) descriptions of new taxa and proposal for new treatments. *Elytra*, New Series, 5 (2): 429–448.
- 秋田勝己・益本仁雄, 2016. 日本産ゴミムシダマシ大図鑑. 302 pp. むし社.
- 木村史明・池田 大, 2022. 令和2年度 飛鳥地域における昆虫相調査. 橿原市昆虫館研究報告, (1): 4–19.
- Masumoto, K., & K. Akita, 2008. New or little-known tenebrionid species (Coleoptera) from Japan (6) two new species from Honshu and Ishigaki-jima Island. *The Entomological Review of Japan*, 63 (1): 35–41.
- 三木孝人, 2019. フトヒメツノゴミムシダマシを島根県出雲市で採集. ホシザキグリーン財団研究報告, (22): 130.
- 大野友豪・戸田尚希・石川進一朗, 2019. フトツノゴミムシダマシを愛知県で採集. 佳香蝶, 71 (280): 111–112.

(渡部晃平 920–2113 白山市八幡町戊3番地
石川県ふれあい昆虫館)

【短報】淡路島におけるタマムシ科甲虫2種の新分布記録

淡路島(兵庫県)は瀬戸内海の東端近くに位置し、日本国内では対馬に次ぐ面積(約592 km²)の島として知られている。同島からはこれまでに15種のタマムシ科甲虫が記録されている(高橋, 1997, 1998, 1999)。筆者は淡路島にて分布記録のない2種の本科甲虫を採集したので、ここに報告する。なお、本研究の一部はJST次世代研究者挑戦的研究プログラムJPMJSP 2119の支援を受けた。

1. シラホシナガタマムシ *Agrilus decoloratus*



図1-2. 淡路島産タマムシ科甲虫2種。1, シラホシナガタマムシ; 2, ムネアカチビナカボソタマムシ原名亜種。

Kerremans, 1892 (図1)

2 exs., 兵庫県洲本市由良町由良, 13. VII. 2022, 筆者採集, 保管。

寄主植物であるエノキ (*Celtis sinensis*) のスウィーピングによって得られた。

2. ムネアカチビナカボソタマムシ原名亜種 *Nalanda rutilicollis rutilicollis* (Obenberger, 1914) (図2)

3 exs., 兵庫県洲本市由良町由良, 13. VII. 2022, 筆者採集, 保管。

寄主植物であるアカメガシワ (*Mallotus japonicus*) のスウィーピングによって得られた。

引用文献

- 高橋壽郎, 1997. 淡路島産甲虫類に関する文献目録(1). PARUNASSIUS, (45): 1–10.
- 高橋壽郎, 1998. 淡路島産甲虫類に関する文献目録(2). PARUNASSIUS, (46): 1–10.
- 高橋壽郎, 1999. 淡路島産甲虫目録(2). PARUNASSIUS, (48): 1–16.

(瑠寺 裕 060–8589 札幌市北区北9条西9丁目
北海道大学大学院昆虫体系学研究室)

【短報】飼育下で確認されたゲンゴロウ属のヒシへの産卵

国内に生息するゲンゴロウ属, ゲンゴロウモドキ属といった大型のゲンゴロウ科は水生植物の基質の内部に産卵し、産卵する水生植物の種類には選好性があることが知られ、生息地においては水生植物の量が個体数の制限要因になっていると考えられている(市川, 2002; Inoda, 2011a, b)。

ゲンゴロウ属は国内に7種が記録されており、た